

近世前期における危惧表現形式:  
近松世話浄瑠璃を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 近藤, 明 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/41679">http://hdl.handle.net/2297/41679</a>

# 近世前期における危惧表現形式

— 近松世話浄瑠璃を中心に —

近藤 明

## Expressions of Anxiety in the First Half of Edo Period

Akira KONDOH

### 一 はじめに

#### 一・一 問題点と方法

近藤明(二〇一三)(二〇一四a)においては、「危惧表現」を

望ましくない事態が起きる可能性がある」と判断し、それを危

ぶむ気持ちを表す表現

という程度に定義し、中古和文や、万葉集・三代集の和歌において

○危惧の意を表す形式は「モノ」「モコソ」だけであったのか、

それ以外に危惧の意を表す形式があったのか。

○もしあったのであればそれはどのような形式であるか。

といったことの見通しを得ようとした。その結果、複合助動詞系の形式・疑問推量系の形式・評価的複合形式風の形式等が、「モノ」「モコソ」以外に危惧表現に与っていた形式の候補として挙げられた。

本稿はこの問題提起を承けつつ、近世前期の上方語において危惧表現に与っていた形式としてどのようなものがあったかの概

略を明らかにしようとするものである。

この時期においては、「モノ」「モコソ」は既に消失しており、近藤明(二〇一三)(二〇一四a)でとつたのと同様の方法は使えない。そのため

i 資料を通読して、危惧の念を表していると判断される場面で用いられている形式に注目してピックアップしていく。

という方法を主にせざるを得ないが、

ii 現代語や、近藤明(二〇一五)でピックアップした近世後期江戸語における危惧表現形式から遡り、それらに該当する形式やそれらの前身と見られる形式に留意する。

iii 近藤明(二〇一三)(二〇一四a)において、古代語における「モノ」「モコソ」以外の危惧表現形式の候補としてピックアップされた形式を念頭に置き、それらに該当する形式やそれらの後身と見られる形式に留意する。

といった観点を併せてとることとする。また局面によっては

iv 時代的にやや降るが近世において「モノ」「モコソ」を「危惧」の意と認識していた富士谷成章や本居宣長が、「モノ」「モ

「モソ」の説明やそれを含む歌の語釈に用いた「里言」「俗言」に目を向ける。  
 ことも有効な手段となり得るかと思う。

iiと関連して、現代語で危惧表現に与る形式と考えられそうなものを挙げると、「カネナイ」「オソレカアル」「トイケナイ」がほぼ危惧表現専用の形式として挙げられ、「ハ(ヤ)シナイカ」も危惧寄りの推量(聞き手が居る場合は危惧の念を含んだ問いかけ)を表すことが多く、「テハイケナイ」は危惧の意も表すが「禁止」等多義にわたり、「カモシレナイ」はそれ自体では「可能性」程度の意味を表し「危惧」の意に限定されるには「ワルクスルト」「ヘタヲスルト」等の副詞類との組み合わせが必要な形式、といったところであろうか。

この中で、近藤明(二〇一四b)で述べたように、例えば「カネナイ」は「タ」を下接することができ、「危惧」をモダリティの一種とするのなら、「疑似モダリティ形式」寄りの形式と位置づけられそうである。一方で「真正モダリティ形式」寄りと位置づけられそうな形式も右の中にはあり(疑問表現系の形式等)、この点だけから見てもこれらの形式は必ずしも等質的な整理されたものとは言えない。

また以下も近藤明(二〇一四b)で述べたことと重なるが、iiiの点との関連で気をつけておく必要があると思われるのが、「モソ」「モソ」によって表される「危惧」の性質である。

山口堯二(一九九〇)は、疑問表現のうち「危惧の念がめだつ」ものを論じる中で、「毎日がこんな風ではどうなつてゆくことか」(川端康成「雪国」 新潮文庫一〇八①)のような疑問詞を含むものを「不定方式」と称している。それに倣って、これから事態がどうなるか分からず危ぶむという危惧や、特定できないが何か

望ましくないことが起きる可能性があるという危惧を「不定的危惧」と呼び、特定の望ましくないことが起きる可能性があるという危惧を「特定の危惧」と呼ぶとすると、「モソ」「モソ」が表す危惧は「特定の危惧」の方だけではないかと思われる。

また同じ山口堯二(一九九〇)が挙げる例の中には「海浜ホテルは、閉まってやしないか」(岸田国土「紙風船」岸田国土全集1 p.198⑩)のように、望ましくない事態が既に実現していたり進行中であつたりすることに對する危惧を表しているものがある。このようなものを「既実現事態危惧」、まだ実現していない事態がこれから実現することを危惧するものを「未実現事態危惧」と呼ぶことにすると、「モソ」「モソ」の表す危惧は基本的に「未実現事態危惧」の方ではないかと思われる。

本稿は「モソ」「モソ」を言わば基点とする形で、前述のような問題を追究する試みの一つであるところから、「特定の危惧」「未実現事態危惧」を中心としつつ、必要に応じて「既実現事態危惧」「未実現事態危惧」にも言及することとする。

用例をリストアップするに当たっては、「不定的危惧」については、「特定の危惧」を表すのと共通の形式と疑問詞との組合せで表されるものまでを対象とする。「既実現事態危惧」と「未実現事態危惧」については、未実現事態危惧に用いられる形式(「ハセマイカ」等)までを対象とし、既実現事態危惧と解される例しかない形式(「ハセスカ」等)は必要に応じて言及する程度にとどめることとする。

なお危惧表現形式としてリストアップするのは、基本的に動詞で表される事態を危惧する形式とする。用例の採取は、原則として口語体の箇所に見られるものを対象としたが、必要に応じて文語体の箇所に現れるものに言及することもある。

## 一・2 資料

資料とする。近松世話浄瑠璃は、曾根崎心中(元禄十六年一七〇三年初演)から心中宵庚申(享保七年一七二二年初演)に至る次の二四編である(配列は『近松全集』の所収順による。また以下の論述や表等で作品名を掲げる際は、略称を用いることもある)。

曾根崎心中 心中二枚絵草紙 卯月紅葉 堀川波鼓 卯月の潤色 五十年忌歌念仏 心中重井筒 丹波与作待夜のこむろぶし 淀鯉出世滝徳 心中刃は水の朔日 心中万年草 薩摩歌 今宮の心中 冥途の飛脚 夕霧阿波鳴渡 長町女腹切 大経師昔暦 生玉心中 鐘の権三重帷子 山崎与次兵衛寿の門松 博多小女郎波枕 心中天の網島 女殺油地獄 心中宵庚申

用例の検索に当たっては、国文学研究資料館の「大系本本文データベース」、「ジャパナレッジ」の新編日本古典文学全集の本文検索機能を利用し、教育社刊「近世文学総索引」も参照したが、最終的には『近松全集』によって用例を確認し、引用も同全集によった。用例に付す巻数・頁数・行数も同全集のものである(例えば「④五六九⑦」であれば、『近松全集』第四卷五六九頁七行目の意)。引用の際、表記には適宜手を加えたが、問題とする表現形式の表記は同全集のままとした。また近松浄瑠璃以外の資料は、巻末の「資料」に示すものによった。

## 二 可能・可能性系の複合的形式

## 「カネナイ」

近藤明(一九九四)において、「カネナイ」は古くは「可能」の意を表していたが、明和・安永期頃から「危惧」の意のものが現れる旨論じた。だがこれは近松浄瑠璃の調査を旧日本古典文学大

系収録作品に限っていた等、調査に不徹底なところがあつたためであり、山田忠雄(一九八九)(一九九七)によると、「危惧」の意のものが現れる時期は正徳・享保頃と、より遡ることができるようである。実際、近松世話浄瑠璃においても

①二人が死に出るていを見て見ぬ顔しかねまい。恨めしの者どもやと。「与兵衛夫婦の伯母」

(卯月の潤色 中之巻 ④五六九⑦)  
②その四両が見へぬ故、大じの姪がのぞみも遂げず。死に生きも出来かねまいと思へば胸もふさがつて。「平兵衛」

のように「危惧」の意に解される例を見出すことができる。

ただし、近松世話浄瑠璃においてはなお「可能」の意のものが多数を占め、用例②と同じ「心中刃は水の朔日」にも次のような自己の能力を誇示する場面での例が見られる。

③おのれが身の立つことならばあれらに商ひする迄なく。五百目や六百目はこの利右衛門が出しかねぬ。「利右衛門」

(同上之巻 ⑤四七四⑥)

なお近藤明(一九九四)では、近世期に「カネナイ」が「危惧」の意に転じた原因・背景として、「モソ」「モコン」の衰退・消失を「カネナイ」が埋める形になったことを挙げたが、この見解が見当外れではないとしても、近藤明(二〇一四b)で述べたように「モソ」「モコン」は「真正モダリティ形式」に属し、「カネナイ」は「疑似モダリティ形式」に属するという点で両者は性格を異にする面があると思われ、そのことについての考慮も必要などころであった。その点も含めて今後さらに考察を深めたい。

表：各形式の用例数

シレヌ／シラヌ類	可能・可能性系 (否定)疑 問推量系	留聲崎心中	二枚輪軍紙	卯月紅葉	堀川波鼓	卯月の消息	五十年忌	心中重并置	丹波与作	水の翔日	淀屋出世	心中万草草	薩摩歌	今宵の心中	冥途の飛脚	夕霧阿波	五町女腰切	大徳師骨屋	生玉心中	鐘の権三	舟の門松	博多小女郎	天の網島	女殺油地獄	心中宵夜中	
		~カネナイ						1				1														
~ウモシレヌ								1		1		1	1			1	1	1	2					1		
~モシレヌ																						1				
~マイモ/デモナイ										1																
~ハセマイカ																			1							
~ハマイカ																						1	1			
~ウカ				1	1	2				1		3			1		1				1	1		3		2
~パ	~パワルイ												1					1								
	~バイカガ								1					1												
	~パー大事																						1			
	~バドウシヨウ											1														
~タラ	~タラ大事			1																						
	~タラドウシヨウ/ ナントシヨウ									1																
~テハ	~テハナラヌ	1	1								1															
	~テハイカガ		1		1																					1
	~テハ(一)大事											3	1													
	~テハムツカシ															1										
	~テハ氣ノ毒																								1	
	~テハ難權																								1	
	~テハ迷惑																				1					

○用例数は危惧の意に解されるものみの数であり、不定的危惧・未実現事態危惧も含めている。

ただし、不定的危惧・未実現事態危惧の用例しか認められない形式は本表に掲げない。

○文語体の箇所のみ見られる形式は本表に掲げない。

現代語の「カモシレナイ」は、「可能性」を表すとされることが多いが、その「ウカモシレナイ」の前身に相当するかと思われるものとして、この時期には「ウモシレヌ／シラヌ」が多く見られる（なお以下「ウモシレヌ／シラヌ」等と称する場合、否定「ヌ」の部分が「マイ」等であるもの、「シレヌ／シラヌ」の部分が「存ゼヌ」のような敬語形になっているものも含むこととする）。

「ウモシレヌ／シラヌ」

左の④は特定の危惧の例、⑤は疑問詞を伴って不定的危惧を表している例である。

④ わるふしたらば内外の者も置き替へ銀持てくる奉公人。敷金する手間取を尋られふもしれまい。〔晒搦（「お蝶の父」）〕

⑤ 仕合のわるい時は何で損をせふもしらぬ。〔伊左衛門〕

（夕霧阿波鳴渡 上之巻 ⑦五三九⑥）

用例の多くが「危惧」の意に解されるが例外もあり、「危惧」の意に限定されるには④のように「ワルウシタラバ」といった副詞の類と共起することが必要な形式かとも考えられる。

やや時代は降るが、本居宣長『古今集遠鏡』（二七九三迄に成）において、古今集一〇四の歌の「人もこそ知れ」を、「人ガ知ラウモ知レヌホドニ 人ガ知テハアマリアハウラシイ事ヂヤ」としてお

り（①、ここで「モコソ」の訳として「ウモシレヌ」があてられていることも注目さる。もつとも「人ガ知テハアマリアハウラシイ事ヂヤ」を傍線を付して補つてもおり、「ウモシレヌ」が危惧専用とまでは言えず、そのような語句を加えて「危惧」の意であることを明確化しないと、「危惧」の意が十分に伝わらないことを物語っているのかも知れない②）。

なお、文語的な「ンモシレズ」の用例も存在するが、表には加えていない。

「ウモシレヌ／シラヌ」

未実現事態に対しては多く右のように「ウ」を伴う「ウモシレヌ」(文語体では「ンモシレズ」)が用いられるが、

⑥子故には愚鈍になり不調法申も存ぜぬ。〔浄閑〕

(寿の門松 中之巻 ⑩三五三⑧)

は「シレヌ／シラヌ」の部分が敬語形「ソソゼヌ」になつてはいるが、未実現事態危惧を表すのに「ウ」を伴わない「ウモシラヌ」の形が用いられた例と考えられる。ただし、既に言つてしまつたことも含む一般論的な面もあるかも知れない。

他に「ウタカシラヌ」にも「おれを見たかしらぬ迄。怖いこと

ぢや」(与兵衛)〔卯月紅葉 上之巻 ④四五八①〕のように危惧的に

解されるものがあるが、当然全て既実現事態危惧である。なお山口堯二(二九九〇)は、「疑念の解消の見通しの立ちかねる場合の疑問表現や希望する事態についてその実現がおぼつかないような場合の疑問表現においては「主体の危惧の念が表面化しやすい」して、近世前期の例としては右の卯月紅葉の例を掲げている

## 【二重否定】

「ウマイモノデモナイ」

二重否定の表現形式には、「ウマイモノデモナイ」の形で、

⑦すはとうきくに国へ心がひかされて。未練の出来まいもの

でもなし。〔小かん〕

(水の朔日 中之巻 ⑤四八八⑤)

と、危惧の意を表していると思われる例がある。現代語の「ウマイモノデモナイ」について、「わずかな可能性の存在を認める」(松原幸子(二〇〇八))といった見解があるところから、可能性系の複合表現と位置付けておく。近松世話浄瑠璃では確実に「危惧」の意と解されるのは右の一例のみで、危惧専用性は弱いと言えそ

うであるが、近松以外でも

⑧若いやつらのことなればたんきを出すまい物でもなし。〔仁右衛門〕(紀海音 ふたつ腹帯「一七三二初演」第三 三三三④)

といった例がある。

なお近世後期には「ウマイモノトモイワレナイ／イエナイ」の形もある程度見られたが、近松世話浄瑠璃では文語体の箇所には「誰が身の上は何事の。あるまいともいひがたし」〔お梅の母〕(心中万草草 中之巻 ⑤七一八⑧)という不定的危惧の例がある程度である。

## 三 否定疑問(推量)・疑問推量系の形式

### 【否定疑問(推量)類

「ウマイカ」等

近世後期においては、「後で蚯蚓になりやアしめへか」(八笑人五編下 岩波文庫 三〇四⑥)の「ウハ(ヤ)シマイカ」のような「ウハ・サ変動詞+否定+カ」と一般化される形式が多用されるが、近松世話浄瑠璃では

⑨来世迄。かう手を引いて行くことか。もしやはなればせまい

かと (生玉心中 下之巻 ⑨六一五⑤)

の一例が道行の箇所での嘉平次・おさがの心情描写に見られるのみである。

ただ、「ウマイカ」だけでは危惧の意を伴わない単なる否定疑問推量であることも多いが、それと比べると⑩のような「ウハセマイカ」(この場合「モシヤ」と共起してもいる)や

⑩ぬれから起つた喧嘩さうな。大ごとにはなるまいかと〔廓の女中ら〕 (博多小女郎 上之巻 ⑩七七〇⑩)

のように、サ変動詞を介さないが「ウハウマイカ」の形をとつた

もの④、あるいはそれが更に

⑩ひよつと憂い目は見せまいか。〔孫右衛門〕

(天の網島 下之卷 ⑩七四六①)

のように、「ヒョット」等と共起したものは、「危惧」の意になりやすいとは言えそうである。

〔ウカ〕等

現代語では「ハヤシナイカ」は、「ひよっこり准尉がはいってきはしないか」(『真空地帯』第二章十 岩波文庫上一二七⑤)のように未実現事態危惧に用いられるのが普通と思われるが、近松世話浄瑠璃で「ハセヌカ」⑮は、

⑫紀伊国屋の小春殿はお帰りなされたか。もし治兵衛とつれ立ていきはなされぬか。〔孫右衛門〕

(天の網島 下之卷 ⑫七四四⑩)

のように既実現事態危惧に用いられており、未実現事態危惧の確実な例はない⑯。ただし「ウカ」だけでは「危惧」の意を含まないものが多く、それらと比べると⑭のような「ハセヌカ」(この場合「モシ」と共起してもいる)や

⑬アア氣遣ひで身が震ふ。小春をつれてはゆかぬかと。〔孫右衛門〕

(天の網島 下之卷 ⑬七四四⑥)

のように、サ変動詞を介さないが「ハセヌカ」の形をとったもの、あるいはそれが更に

⑭右の脈が頭がちなはもしすりこ木などは参らぬか。〔医師渋川卜庵〕

(今宮の心中 中之卷 ⑭二四一⑦)

のように、「モシ」等と共起したものは、「危惧」の意になりやすいので、その点「ウマイカ」と通じるところが多い⑰。

総じてこの時期の否定疑問(推量)類の表現形式は、前述の「ハ

ハヤシマイカ」が定着する以前の過渡的な様相を呈しているように思われる。

【疑問推量】類

〔ウカ〕等

(肯定)疑問推量類の形式単独では、「ウカ」に

⑮舅の恨に我身を忘れ。無分別も出やうかと。〔孫右衛門〕

(心中天の網島 下之卷 ⑮七四五②)

⑯若い心の一すぢにはづかしいとばかりで。もしや死なふか。悲しやと。〔お梅の母〕

(心中万年草 中之卷 ⑯七一九③)

のように危惧の念を伴って用いられた例があるが、⑯のように「モシ」系副詞との組合せでの使用(他に「モシ」一例)や

⑰人がこふかときづかひな。〔お梅〕

(心中万年草 中之卷 ⑰七一四③)

のように「キツカイ(ナ)(サ)」「キガカリ」「キニカカル」(各一例)等との組合せでの使用が目立つ。

口語体の箇所では右の「ウカ」が候補に挙げられる程度であるが⑱、文語体の箇所で見られる「ヤクシ」は、特に

⑱内の者が見付やせんと。〔与兵衛〕

(卯月紅葉 中之卷 ⑱四六八⑫)

のようにサ変動詞を介した「ヤ・セン」の形をとった場合、危惧的な場面での使用が目立つようである。当時の口語の様相の何らかの反映なのか、近世(もしくは近松)文語の特徴的なことなのか、古語における何らかの側面を継承したものなのか、一考を要するかも知れない⑳。

なおこれら否定疑問(推量)・疑問推量系の表現形式では、聞き手が居る場合、危惧の念を含んだ問いかけである例も見受けられる(用例⑬⑭)。これは「可能・可能性」系の形式や評価的複合形

式には見られない特徴のようである。

#### 四 評価的複合形式

矢島正浩(二〇一三)に倣って、「条件形+評価語」の形をとる形式を「評価的複合形式」と呼び、その中で「危惧」の意に解されるものを以下取り上げることとする。

##### 【前項部】

まず前項部の条件形に着目すると、当該の用例が見られるのは「くバ」「くタラ」「くテハ」の三者であり、特に「くバ」「くテハ」が目につく。近世後期に目立つ「くト」がまだ認められず、一方で近世後期には見られなくなった「くバ」がまだ一定の勢力を保っている点が目立つところである。

以下更に後項部に着目して分類・整理しつつ、論を進めていく。

##### 【後項部】

近世後期においては、「くイケナイ/イカナイ」を後項部とする「くトイケナイ」「くテハイケナイ」等の台頭が認められる一方、「くワルイ」を後項部とする「くトワルイ」等もおお根強く用いられるという状況が看取されたが、近松世話浄瑠璃においてはまだ「くイケナイ/イカナイ」を後項部とする形式は認められない。

##### 【くワルイ】

時代的にやや降るが、富士谷成章『あゆひ抄』(一七七八刊)では、「モソ」について「下に「うに」又「ばわるいに」とつけて心得べし」(富士谷成章全集 上p七二六)と説明しているが、この中の「くバワロイ」(又は「くバワルイ」)は、現代では耳慣れない形式ながら、矢島正浩(二〇一三)によると、近世中期資料に現れる評価的複合形式とのこと<sup>10)</sup>、近松世話浄瑠璃にも

⑩アア酒に多ふたら忘れてひよつと言やればわるい。「おさん」(大経師昔暦 下之巻 ⑨五四四④)等の例が認められる。

善悪判断系の形容詞では、他に「アシ」が後項にくる「くバアシ」「くテハアシ」も例が認められるが、いずれも文語調の箇所である。

##### 【くナラヌ】

当為判断系の形式では、前述の「イケナイ」がまだ認められない一方、後項部に「ナラヌ」が位置する「くテハナラヌ」が認められる<sup>(11)</sup>。

⑪また踏まれてはならぬぞと駆け出してこそ走りけれ。「下女」

(一枚絵草紙 下之巻 ④一九九⑩)

ただし「当為の否定・不適當」「禁止」の意―現代語ではむしろ「危惧」ではなくこちらで用いられると思われるが―と見られる例もあり、危惧表現専用とは言えない。

##### 【く他】

これ以外に後項部には、不適當判断を表す「イカガ」<sup>12)</sup>、不都合・困難・難渋との判断や困難・当惑の意を表す「(一)大事」「ムツカシイ」「氣ノ毒」「難儀」「迷惑」「ナントシヨウ」「ドウシヨウ」等が見られるが、「評価的複合形式」の中に加えることが適当な例か、複合化・文法化が進んでいない例かの区別に迷うようなものも少なくない。一方で、前述の『古今集遠鏡』で、「モソソ」の訳として「アハウラシイ」を後部要素とする評価的複合形式にも見える「くテハアハウラシイ事ヂヤ」が充てられていること等を考えると、範囲を広めに考えておくのがよいようにも思われる。

この中で

⑫こいつはしやべりの転婆め見付けられては大じぞと。「笹野三 五兵衛」(薩摩歌 上之巻 ⑥六六一⑥)

のような後項部が「大事」である「くテハ大事」「くタラ大事」は、近世後期に見られる「くテハ大変ダ」「くト大変ダ」につながる形式のようにも思われるし、後項部が「イカガ」である「くバイカガ」「くテハイカガ」のうち、前者の「くバイカガ」は二例とも②大じのお姫様の乳離れ御病氣も出ればいかがとて。「滋野井」のように病気になること・病氣が悪化することを危惧する文脈で用いられている<sup>(13)</sup>。

また「ムツカシイ」「氣ノ毒」「難儀」が前項目「くテハ」と組み合わされたものには

- ② ヤアア中の島の八右衛門。きやつに逢てはむつかしと、東のかたへ出ちがへば「忠兵衛」(冥途の飛脚 上之巻 ⑦二八七①)

② ハツあ会ふてはきのどく隠れたい。「徳兵衛」

(女殺油地獄 下之巻 ⑫一七六①)のように、特定の人物に会うことを危惧してそれを避けようとするという似通った文脈。「テハ大事」の用例②もその点類似するが、で用いられている例がある<sup>(14)</sup>。

いずれにせよ、近世後期の評価的複合形式はある程度整理が進んできたように見受けられるのに対し、この時期のそれは未だ整理の進んでいない観が強く、特に後項部において然りである、ということとは言えそうである。

## 五 おわりに

近世は、前述のように既に「モン」「モクソ」が消失しており、それに伴って危惧表現体系に変容が生じて古語とは異なる様相を呈していることが予想される時期である。ただし近世後期江戸

語においては、現代語へのつながりが濃厚に感じられる面が種々現れてくるのに対し(近藤明(二〇一五))、近世前期上方語では、「くカネナイ」、否定疑問形の形式、評価的複合形式等において、またそれとは異なつた過渡期的様相を呈する面が認められた。本稿では、各形式の意味・用法の詳細な検討に及ぶことはできなかったし、副詞の類については、本文で触れたもの以外に「シゼン(自然)」「エテ」等もあるが、これらの考察は別稿を期すこととしたい。

## 注

(1) 引用は筑摩書房本居宣長全集第三巻(p56)により、傍線は原文のまま。同書の「例言」(p112)に、「かたへに、長くも短くも、筋を引たるは、歌にはなき詞なるを、そへていへる所のしるしなり」とする。

(2) 近松世話浄瑠璃以外では「ぶほうかうすりやしんだいのひづみにならふもしれぬ事」「太郎兵衛(紀海音 袂の白しほり「一七二初演中之巻 一七二②)の「不果報スリヤ」も、同様と思われる。

(3) 近松以外では「初めてのことなれば、おとこの心もしらず、又は淫ぶん強きもいわれざる有、無理なこといふもしらぬことなれば(難波鉦「一六八〇刊」 松之部二 細道 六七⑩)も同様か。

(4) 「くハ・サ変動詞+マイカ/ヌカ」の場合、「く」の部分は「離れはせまいか」「氣が違ははしませぬか」のように基本的に動詞連用形である。一方、サ変動詞を介さない「くハ・マイカ/ヌカ」と称するのは、一つ目の「く」の部分に「大事になる」「連れて行く」のような動詞句の前半部が、二つ目の「く」の部分にその後半部が来るものである。

(5) 「セヌ」の部分が敬語形「ナサレヌ」「イタサヌ」等の敬語形であるものも含む。

(6) 扱々うつぶいてばかり。首筋がいたみはいたさぬか。「侍」孫右衛門の変装(天の網島 上之巻 ⑩七〇八③)という例は、「俯いてばかりいてはこの後首筋が痛むことにならないか」との未実現事態危惧のようにも見えるが、「俯いてばかりいるので(その結果既に)首筋が痛んでいるのではないか」という既実現事態危惧と解するのが自然か。

なお山口堯二(一九九〇)では、この形式が疑問詞と共に起した「どこもいたみはしませぬか」「梅川」(冥途の飛脚 下之巻 ⑦三二七③)が、不定的危惧を表す例として挙げられている。

(7) 山口堯二(一九九〇)に「危惧性の例」として掲げられている「鼻はゆがまぬか見よ」(虎明本狂言 鼻取相撲 上一九一⑩)が、虎寛本では「某が鼻はゆがみはせぬか見て呉い」(上二五〇⑬)となっているのは、この間の変遷を反映するものかとも思われる。

この他に「くナンダカ」も「なんと遠見に見付られはせなんだか。」「毛剃九右衛門」(博多小女郎 上之巻 ⑩七五三⑤)のように「ハ・サ変動詞+ナンダカ」の形で用いられた場合「危惧」の意に傾くようであるが、当然全て既実現事態危惧である。

(8) 時代がやや遡るが、東国資料「雑兵物語」では推量系助動詞として「ペイ」が多用され「大切ななを落とせしやしべし」(下二〇才①)という「イヤ・サ変動詞+ペイ」の例も見られる。

(9) この他否定疑問「ズヤ」「ズカ」「ヤ」「ヤ」等が危惧を含んだ文脈で用いられた例も見られるが、文語的であったり、危惧の念を含むと解される例が少なく形式として「危惧」の意との親近性が認められるかが不明であったりといった問題がある。

(10) 矢島は近松浄瑠璃以外に歌舞伎「好色伝受」(二六九三初演)や同「傾城浅間嶽」(二六九八初演)の例を掲げる。他に「又こんどもゆけといはるればわるひ」(虎明本狂言 清水 中五九⑦)や「エエ此寒いのに膝所にやつぱり居たがよござります。冷れば悪い」「久松」(近松

半二 新版歌祭文 野崎村の段 一四七③)等の例を加えることができる。

(11) 虎明本狂言にも「私が鍋のあたりを、棒をもつて打ち割らうといたす程に、打ち割られてはなるまいとぞんじて、是へたちのひて」(鍋八撥 上二三〇③)といった例が存する。

(12) 于康(一九九九)に近世の「イカガ」(述語用法の意味・用法として「話し手の不適當の判断を表すもの」を挙げることによる。その場合「ナラヌ」同様、当為判断系の形式ということになる。

(13) 近松世話浄瑠璃以外では「衆みな今までの悪くなつた味噌をたべますれども、禪師は御病者にござれば、若しあたればいかがとあつて、大梁のさしづによつて、別の味噌をつき、師ひとりに進む」(盤珪智弘濟禪師御示聞書 上巻一七五七刊 盤珪永琢は一六二二一・一六九三 五〇①)という例も同様。

(14) 近松世話浄瑠璃以外では「なむ三 あふては叶はぬと。編笠かぶり迷廻る」(半七「紀海音 三勝半七二十五忌」一七一九?初演)上之巻二五二⑨)のような「くテハカナワヌ」にも、同様の文脈で用いられた例がある。また前項部分が条件系でない例として「会ふてやかまし」(こ御免と神子のかどにぞ隠れける「与兵衛」(卯月紅葉 上之巻 ④四五八⑫)といったものもある。

#### 参考文献

- 于康(一九九九)『日本語に於ける不定語の構文機能に関する歴史的研究 ―副詞的不定語を中心に―』(淡水社)
- 小野正弘(一九九六)『《困惑》を表す語彙―近松世話浄瑠璃を資料として―』(『日本語学』一五・三)
- グループ・ジャマシイ(一九九八)『日本語文型辞典』(くろしお出版)
- 近藤明(一九九四)『危惧の「くカネナイ」の成立』(『北陸古典研究』九)
- 近藤明(二〇〇八)『くカネル』『くカネナイ』における「話し手の期待」

- の正負の方向性をめぐって」(『金沢大学語学文学研究』三六)
- 近藤明(二〇一三)「中古における危惧表現をめぐって―「モン」「モコン」とその周辺―」(『国語語彙史の研究』三二 和泉書院)
- 近藤明(二〇一四a)「万葉集・三代集における危惧表現をめぐって―「モン」「モコン」を基点として―」(『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要』六)
- 近藤明(二〇一四b)「モン」「モコン」の表す「危惧」の性質をめぐって(上)」(『北陸古典研究』二九)
- 近藤明(二〇一五)「化政期―幕末期における危惧表現形式―滑稽本・人情本を資料に―」(『国語語彙史の研究』三四 和泉書院)
- 佐々木峻(一九九三)「大蔵流狂言詞章の文末表現法―「…お知らせ。」「…お知らせぬ。」等の言い方について―」(山内洋一郎・永尾章曹編『近代語の成立と展開』和泉書院)
- 渋谷勝己(一九八八)「江戸語・東京語の当為表現―後部要素イケナイの成立を中心に―」(『大阪大学日本学報』七)
- 高山善行(一九九六)「複合係助詞モン、モコンの叙法性」(『語文』六五)
- 田中章夫(二〇〇二)『近代日本語の文法と表現』(明治書院)
- 仁田義雄(一九九二)『日本語のモダリティと人称』(ひつじ書房)
- 日本語記述文法研究会(二〇〇三)「第3章 評価のモダリティ」『現代日本語文法④ 第8部モダリティ』くろしお出版)
- 松尾聰(一九八四)『源氏物語を中心とした語意の紛れ易い中古語放』(笠間書院)
- 松原幸子(二〇〇八)「くはないものでもない」に関して」(『日中言語研究』と日本語教育』一)
- 矢島正浩(二〇一三)『大阪・上方語における条件表現の史的展開』(笠間書院)
- 山口堯(一九九〇)『日本語疑問表現通史』(明治書院)
- 山口堯(二〇〇〇)「副詞「もし」の通時的变化とその周辺」(『京都語

## 文』六)

山田忠雄(一九八九)『評判記』非是沙汰」(『歌舞伎評判記集成 第二期

5』付録 岩波書店)

山田忠雄(一九九七)『私の語誌 3 一介の』(三省堂)

資料(近松世話浄瑠璃以外。本文中に記したものは除く)

虎明本狂言大蔵虎明本狂言集の研究) 虎寛本狂言岩波文庫) 雑兵物語

(雑兵物語研究と総索引) 難波鉦(岩波文庫) たもとの白しほり・三勝半

七二十五年忌・ふたつ腹帯(以上旧日本古典文学全集) 盤珪仏智弘濟禪

師御示聞書岩波文庫) 新版歌祭文(旧日本古典文学大系) 妹背山婦女庭

訓(新編日本古典文学全集)

## 付記

本稿は科学研究費補助金(基盤研究C 課題番号25370513)

による研究成果の一部である。

## 追記

金沢大学名誉教授深井一郎先生が二〇一三年六月二日に亡くなられた。本稿でも『雑兵物語研究と総索引』を利用していただく等、多くの学恩を賜ったことに感謝し、ご冥福をお祈りする。